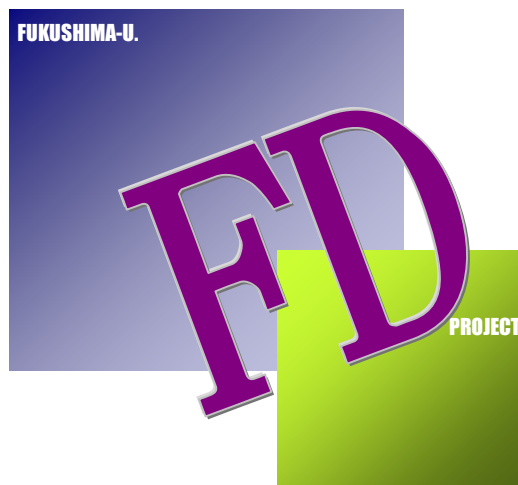


平成 26 年度 (2014 年度)

福島大学 F D 活動報告書

～大学教育改善の追求～



2015 年 3 月

福島大学教育企画委員会



1.はじめに（本報告書の概要）

平成 26 年度 FD 活動の全体を、ここにまとめて報告いたします。

内容は FD 宿泊研修にはじまり、各学類・研究科の FD 活動の紹介、そして「教育改善のための学生アンケート」の集計結果および分析、といったほぼ昨年度どおりのものです。ご覧いただければ幸いに存じます。

特筆すべきことを一つあげさせていただきます。

学生アンケートは実施してすでに 10 年以上経過し、そのものとしてはすっかり定着しています。むしろなんらかの見直しを迫られていながら、なかなか着手できませんでした。平成 26 年度、教育企画委員会にてアンケートの見直しを開始されました。見直しの焦点となったのは、つぎの 3 点です。

- ①アンケートの隔年実施と改善結果の可視化について
- ②記名式アンケートの導入について
- ③アンケート結果の利用の弾力化について

このうち①について、平成 26 年度教育企画委員会での何度かの審議ののち、各学類教員会議において了承されました。

アンケートの隔年実施は、各種アンケートの負担の重さ、それにもかかわらず負担に見合うだけの成果のなさ、という学生の不満に応えるものです。同時に学生の声が授業改善につながっているかどうか、よく見えないという外部評価、監事監査からの批判に応え、フィードバックレポートを全教員に回答してもらうことにいたしました（平成 28 年度より実施）。

学生の声に応えるには、いろいろな方法があると思います。今回のやり方の目的は、それぞれの担当者の最良の改善方法を提示してもらい、学生のみか他の教員の皆さまにも、その成果を共有してもらう、というものです。このレポート集がユニークなヒントのいっぱい詰まった宝石箱のようなものになってくれればと願うしだいです。

アンケート見直しの残りの 2 点については、現在議論を重ねているところです。この見直しをとおして、学生アンケートが、そしてまた授業そのものがよりよいものとなることを期待いたします。



平成 26 年度
福島大学FD活動報告書

～大学教育改善の追求～

目 次

1. はじめに 教育担当副学長	神子 博昭
2. FD 宿泊研修	1
3. 授業公開 & 検討会	16
第 1 回（授業者：衣川 修平）	17
第 2 回（授業者：浅野 かおる、千葉 悦子、岩崎 由美子）	19
第 3 回（授業者：増田 正）	21
授業公開・検討会配布資料	23
4. 各学類・研究科における FD 活動	25
5. 現代教養コースにおける FD 活動	30
6. 共通教育における FD 活動	48
7. その他の FD 活動	76
8. 他大学 FD 研修等参加報告	105
9. LiveCampus を利用した中間アンケート実施結果	108

10. 「教育改善のための学生アンケート」 集計結果	111
「教育改善のための学生アンケート」に関する平成 26 年度の活動	112
「教育改善のための学生アンケート」 （前期）集計結果	124
「教育改善のための学生アンケート」 （後期）集計結果	144



2.FD 宿泊研修

平成26年度FD宿泊研修記録

平成 26 年度 F D 宿泊研修記録

🚩 テーマ：教養教育の Re Design ―1 年次必修科目から考える―

🚩 日 時：平成 26 年 9 月 27 日（土）～28 日（日）

🚩 場 所：二本松市 岳温泉 あづま館

🚩 参加者：学生 13 名、教員 9 名、職員 8 名、講師（東北大学）2 名 計 32 名

🚩 FD 宿泊研修の趣旨と目的

FD 合宿研修会は、学生と教職員が一堂に会し、授業改善等の大学教育の質の向上について集中的に話し合う合宿の機会を設けることで、学生の声を取入れた大学づくりを進めることを趣旨としている。また、FD 合宿は、普段交流しない者同士の交流の促進や、大学生生活をふり返り、自らの成長や課題を確認する機会とすることも企図している。

🚩 テーマ「教養教育の Re Design ―1 年次必修科目から考える―」について

昨年度の FD 宿泊研修のテーマは「大学で身につけたい（身につけさせたい）能力」であった。専門能力に加えて様々な能力が提示されたが、それらはいわゆる「幅広い教養」と呼ばれるものであると考えられる。この「幅広い教養」を身に付けるための大きな枠組として「共通教育」が考えられるが、平成 24 年度『学生による「共通教育アンケート」実施結果報告書』等からは福島大学の教養教育に関する様々な意見が窺われる。

そこで、昨年度の FD 宿泊研修の成果と課題を引き継ぐ形で、今年度は「教養教育の Re Design ―1 年次必修科目から考える―」というテーマを設定し、「福島大学の教養教育はこのままでよいのか」について検討する機会とした。

🚩 スケジュール

□ 1 日目：9 月 27 日（土）

11：30～ 開会行事

12：50～13：10 趣旨説明（総合教育研究センター 丸山和昭）

13：10～14：00 話題提供「東北大学の教養教育と学生支援」

（東北大学高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター助手 足立佳菜・鈴木学）

14：00～14：30 個人ワーク

14：30～18：30 グループワーク

□ 2 日目：9 月 28 日（日）

09：00～10：30 報告会

10：30～10：50 ふり返りと共有

10：50～11：00 閉会行事

🌈 FD 宿泊研修内容

□ 趣旨説明

開会行事を経て昼食の後、福島大学総合教育研究センター高等教育開発部門の丸山准教授より FD 宿泊研修の趣旨、我が国の教養教育に関する制度、福島大学の教養教育、教養教育を考える枠組み、他大学の事例の説明、及び講師紹介が行われた。

まず、教養教育に関する制度について大学設置基準が大綱化され、自由なカリキュラム編成が可能となったことが示された上で、福島大学の教養教育の現状が確認された。その上で、教養教育を考える枠組みとして、1) 目的、2) カリキュラム、3) 授業・学修、4) スタッフの4つの視点が提示された。次に、これらの視点を踏まえつつ、筑波大学（総合科目）、武蔵野大学（基礎セルフディベロップメント）、京都大学（Xmajor）の教養教育に関する事例が紹介された。

□ 話題提供「東北大学の教養教育と学生支援」

今回の FD 宿泊研修では、他大学の事例も参照するべく、東北大学高度教養教育・学生支援機構 学習支援センターより足立佳菜氏（助手）と鈴木学氏（助手）を招聘し話題提供をいただいた。



足立佳菜 氏



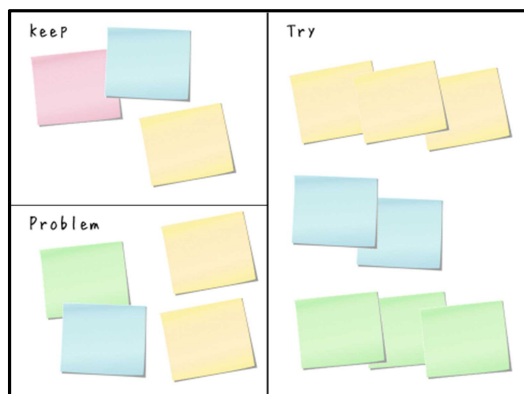
鈴木学 氏

東北大学の教養教育は「全学教育科目」と呼ばれており、なかでも“受験中心型の学び”から“大学での学び”への転換を目指す脱講義型少人数科目「基礎ゼミ」は、学生からも、教員からも高い評価を受けている。当日は、両氏が担当する「『自分』×『学問』～＜はじめの一步＞サポートゼミ～」を事例として紹介いただいた。この科目は、自身が学ぶ学問を自身の言葉で説明できるようになることを到達目標としており、議論の仕方やレポート、プレゼンテーション等のアカデミック・スキルズを身につけるものである。

また、大学での学びを授業外でサポートする組織である「SLA」が紹介された。SLA とは、Student Learning Adviser の略で、主に大学3年生以上の学生が、全学教育を受ける1・2年生の学習サポートを行っている。SLA が、学修支援というよりもむしろ教養教育の実施体制の充実として位置づけられているのは重要な点であろう。

□ 個人ワーク

個人ワークでは、参加者各人の FD 合宿での獲得目標をワークシートに記入するとともに、KPT という手法を用いて福島大学の教養教育に関するアイデアを付箋紙に書き出す作業を行った。



KPT とは、主にワークショップ等で用いられる検討対象のふり返りと今後の方向性を見出す手法であり、K は **Keep**（続けたいこと）、P は **Problem**（不満や問題点）、T は **Try**（工夫や試してみたいこと）の頭文字である。

付箋紙にアイデアを書き出したら、模造紙を左図のように分割し、それぞれの領域に付箋紙を貼り出すが、この作業は続くグループワークで行った。

□ グループワーク

グループワークでは、個人ワークで書き出した付箋紙を K、P、T に分割した模造紙に貼り出しながら福島大学の教養教育についてアイデアを出し合った。話し合う中での新たな発見や気づきはグループワーク中にも付箋紙に書き出していく。



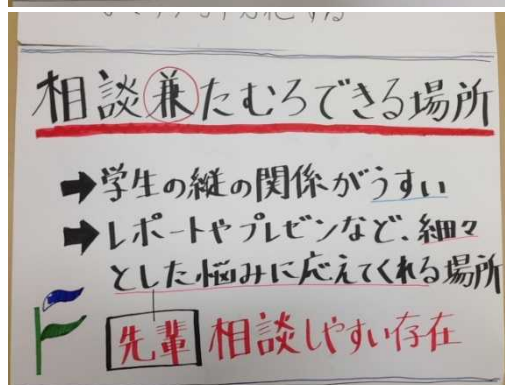
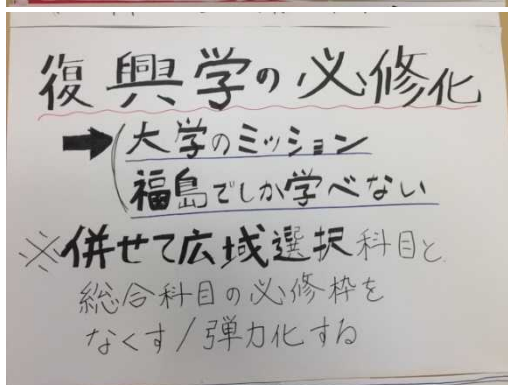
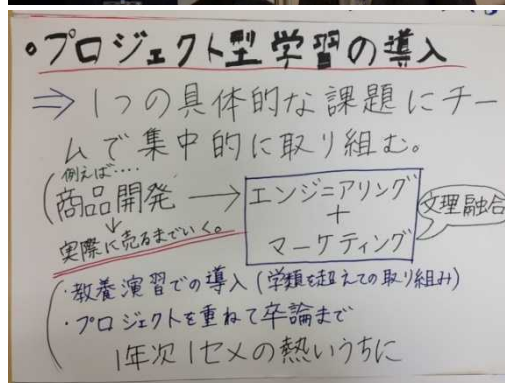
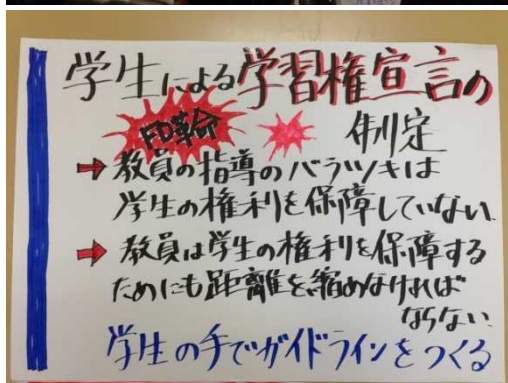
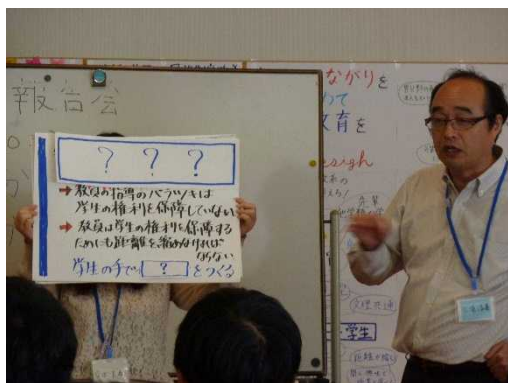
また、グループワークは 3 ラウンドに区切り、2 ラウンド目は、グループに 1 人ホストを残し、残りのメンバーは別のグループへ移動する。移動先では、ホストが 1 ラウンド目にどのようなアイデアが出されたかを紹介し、移動してきたメンバーは疑問や意見を出す。ホストは、移動してきたメンバーから出された疑問や意見を付箋紙に書き出す。

3 ラウンド目は、元のグループに戻り、2 ラウンド目でどのようなアイデアが出されたかを紹介し合いながら翌日の報告会用の発表用資料作成を行った。

発表用資料は、グループワークでの話し合いの内容を K、P、T の視点を基本として、4 枚程度の画用紙にまとめたものである。

□ 報告会

2日目の報告会では、1日目のグループワークの内容を1グループ5分程度で発表した。発表用資料は、画用紙1枚を1スライドに見立てたもので、K、P、Tの視点を基本とした4枚程度のものである。この際、必ずTを提示するようにしているが、K、Pについては必ずしも提示しなければならないわけではない。



報告会では、教養演習やキャリア形成論等の自己デザイン領域、総合科目、広域選択科目、外国語科目、情報科目、健康・運動科目から構成される共通領域の履修基準や、これらの科目での他学類との交流ができる設計のような制度的なもの、アクティブラーニングの促進のように授業内容に踏み込んだもの、オフィスアワーや先輩・後輩との交流、施設・設備の充実等、様々なアイデアが報告された。

□ ふり返りと共有

最後に、1泊2日のFD宿泊研修を終えて、最初に設定した自身の獲得目標が達成できたかや、全体をふり返っての感想等をワークシートに記入し、グループ内で共有した。

□ 閉会行事

閉会行事では、報告会での発表を踏まえて、中井学長より講評をいただいた後、神子副学長の閉会挨拶をもって平成26年度FD宿泊研修を閉じた。

FD宿泊研修では、「達成可能性を考慮しすぎない」ということをグランドルールのひとつとして設定していた。現実問題として実現困難なものある一方、FD宿泊研修第1回（平成14年度）は「キャリア形成論Ⅰ」、第2回（平成15年度）は「教養演習Ⅰ」といった具体的な授業プログラムづくりに活用されている。本宿泊研修の成果が、今後の福島大学の教養教育改善に活用されることが期待される。

目標設定・ふり返りシートの内容

宿泊研修を通しての目標	研修をふり返っての目標達成状況や感じたこと
・ 教養教育に関して、新たな発見を三つ以上見つける。 ・ 積極的な関わりのため、新しい人の名前をご人以上覚える。 ・ 職員目線から一個人目線まで幅広い視野で物事を考えてみたい→人の話を聴く意識を持つ。 ・ 飲み過ぎない。 ・ 風呂に三回入る。	・ 教養教育とは何かという深い概念までたどり着くことはできなかったが、やはり、教員・学生・職員、三者ともより深い関わりを求めているのだと改めて見直すこととなった。
・ （できるだけ多くの）他学類の教員・学生や職員の方と意見を交換する。 ・ 4月に着任したばかりなので、福島大学の教養教育に対して学生がどのような意見を持っているかを知る。	・ 他学類の教員・学生、職員の方と交流出来て、これからの福島県の生活が充実してきそうな予感を抱きました。 ・ このようなワークショップで良いなあと感じたのは、実現可能性ではなく「夢」を可視化して共有できるところだなと感じました。僕もワークショップ型の授業等したことありますが、今回のFDユニットはとてもうまく機能していたと思いますし、今後色々と真似させていきたいと思いました。
・ 福島大学の教養教育を、知識的にも、実態としてもよく知り、自信の活動に生かせる知見を獲得する。 ・ 文脈が異なる立場だからこそその視点をできるだけ提供し、会全体に貢献する。 ・ 研修のあり方自体から研修企画の運営ノウハウを学ぶ！ ・ これらのために全体的に“頭を柔らかくする”！	・ 書いた目標はどれも達成できたと思います。グループワークの作業を通して考えたのは大きく3点で、①「とにかく先生が大変になるなあ…」という印象でした。合わせて「学生のニーズ」をととても大事にする論調が多く、教育主体の教育責任って、どう果たしていくべきなのかなと思いました。②①とも似ていますが、「学生の選択肢を広げる（学生はもっと授業を選びたいとか）」と言うけれど、学生が実際配られているシラバスを読み込んだり、HPをみたり、色々手を打っているかということとそうでもないという現状が気になるのと、いざ選んでもらおうと思ったら、どういう風に情報提供できるかなあと悩んだりしました。③総じて、「夢を語る」のがテーマであっても、「実現可能性」の議論まで視野に入れた議論ができないものかと思いました。難しいのですが…。と、色々考えるきっかけになると共に、会の運営の仕方も学べたのでとても有意義でした。ありがとうございました。
・ 自分の意見をちゃんと伝えられるようにしたい！ ・ 教員や事務の方、他の学生と積極的に話して、仲良	・ 自分の意見はちゃんと伝える事ができたので良かった。また、教員や事務の方、他の学生とも割りと

くなりたい！ ・この2日間で、なるべく人見知りを克服したい！	積極的に話せたので楽しかった。 ・2日間での人見知りの克服は無理だったが、今までにないくらい楽しい2日間だった。来年も定員に達していなかったら是非参加しますので、その時はよろしくお願いします。
・1つのことに固執しないで、多様な意見を考えられるようにしたい。 ・普段関わることのない人と話し、様々な意見や自分の知らなかったことを吸収したい。 ・自分の考えをはっきりと言えるようにしたい。	・普段関わることのない教員、職員、学生と意見を言い合うことができ、良い経験ができた。その中で同じテーマであっても自分とはまったく違った視点からの意見もあり、こんな考え方もあるんだということ学ぶことができた。夜の意見交換会では、普段やっていること、考えていることなど、自分と違う日常の話聞くことができ良かった。
・現在の共通教育を学生がどのように捉えているのか。その実態をできるだけ詳細に多くの学生の声を聞き今後の改革議論に役立てたい。	・特に、総合・広域科目の履修実態について学生から詳しくヒアリングすることができ、今後の改革についての議論のために大いに参考になった。 ・教養教育の内容バラつきへの不満。シラバス、オフィスアワーへの不満の声が少なからず存在することを知り、教員側が十分把握していなかった問題が色々あることを痛感した。 ・教・学・職のコミュニケーションの重要性を強く感じた。
・自分が取り組んだことのないテーマについて考えることで、新たな自分を発見する。 ・自分以外の意見を聞き、取入れ、価値観を広げる。	・自分の中野新たな考え方を発見できた。 ・他の人の意見を聞き、知ることによって、それに同意、同調することがあった。また、自分では考えもつかない意見に驚いたりもした。同じ問題点でも、それを解決するための解が異なったりしたことを面白く感じた。新たな価値観を身につけられた気がする。 ・学生ではなく、社会に出ている方の意見が伺えたのが良かった。これも自主参加型のキャリア形成だと感じた。このような授業があれば良いと思った。
・参加する前には、思いもよらなかった教養教育改善のアイデアを見つける。 ・参加してくれた皆さんと楽しく過ごす。	・参加前には思いもよらなかったアイデアとして多くのものを得ることができた。→特に交流の手段。 ・楽しく充実していた。
・グループワークに積極的に参加する。 ・思ったことをためらわずに言うしてみる。 ・課題意識を自分のものとして持つ。 ・立場の違う人とコミュニケーションをとる。	・目標はおおよそ達成できた。立場が違うけれど「福島大学」というものに思いがある人達と意見交換できて楽しかった。職員の問題として、一般に年齢、役職が上がるほど研修（特に実務に直結しないもの）に腹が重くなることもある。FD合宿に限らず、

	いかに巻き込んでいけるかが課題だと思う。
・ 福島大学を「いま・未来の福島」を担う人材育成のための最良な機関にさせるアイデアを深める。 －柔軟なアイデア・多角的なアイデア。 －4年生として何を与えられるか。 －福島人を作り出したい思い。 ・ 下級生との壁を取り壊す。 －優しく頼れる先輩になる。 －異年齢との交流を増やす。	・ 自分が1年次から思っていたことを発表・共有する機会がもてたのでよかった。 －言語化→深化＋補充。 －コミュニケーション。 ・ 下級生の女の子と話せた。 －教員・職員の方々とも。 －教員・職員・学生さん者のコミュニケーション→よりよい大学づくり！
・ 他の人が授業に対してどのような感想や要望を持っているのか。どのような姿勢で取り組んでいるのかを知ってこれからの授業に活かしたい。 ・ 少しでも自分の意見を出せるようにしたい。 ・ 授業をしている立場の人の意見も聞きたいです。 ・ 参加者の皆さんと楽しくできたらいいです。	・ 今回の研修では、今まで授業を受けてきて考えもしなかったような意見や考えを聞くことができとても有意義な時間だったと思います。発表は緊張しまくって話すことを忘れてしまっても短くなってしまったのが残念でした。しかし、目標に挙げた自分の意見を出せるようにしたいということは達成できたので良かったです。参加した人たちはみんなとてもよい人たちだったのでとても楽しい2日間を過ごすことが出来ました。参加してよかったと思います。
・ 頭が少し硬くなっているので、注意して色々な考え、発想、思いつきがあることに心を開く。 ・ 頭を少し柔らかくする。	・ 硬い石でも雨だれは穴をうがちます。雨だれのやわらかさを見失わないように！！
・ 昨年より口出しをせず、学生の若いアイデアを出しやすいように気を配る。	・ 予想外の「ホスト役」になり、大変ではあったが、昨年より多くの学生と話ができて、意見を聞けたことは有意義だった。 ・ ホストということで口数・口出しが多くなった点は反省。
・ まずは福島大学の教養教育の実態を知る。 ・ その際、「学生から見た」、「教員から見た」、「職員から見た」という視点を意識する。 ・ 「課題」よりも「やってみたいこと」についてのアイデアをたくさん出す！	・ 学生・教員それぞれが福島大学の教養教育をどのように感じているかを知ることができた。 ・ 職員の方の支援が重要であることを再確認した。 ・ 良い悪いは別にして、アイデアはたくさん出すことができた。 ・ 総じて大変楽しく、充実した2日間だった。

グループ1

学生による学習権宣言の制定

→ 教員の指導のバラツキは学生の権利を保障していない

→ 教員は学生の権利を保障するためにも距離を縮めなければならぬ

学生の手でガイドラインをつくる

プロジェクト型学習の導入

⇒ 1つの具体的な課題にチームで集中的に取り組む。

例えば...
(商品開発 → エンジニアリング + マーケティング) 文理融合

実際に売れるまでいく。

・教養演習での導入 (学類を超えた取り組み)

・プロジェクトを重ねて卒論まで

1年次1セメの熱いうちに

復興学の必修化

→ (大学のミッション 福島でしか学べない)

※併せて広域選択科目と

総合科目の必修枠をなくす / 弾力化する

相談(兼)たむろできる場所

→ 学生の縦の関係がうすい

→ レポートやプレゼンなど、細々とした悩みに応えてくれる場所

先輩相談しやすい存在

グループ2

P1 交流

「教員・学生間等の距離が遠い」

オフィスアワー制度が利用しにくい

他学類生との交友の機会が少ない

上級生との交流が継続しない

他学類のOB・OGの接点がない

P2 カリキュラム

自己学習プログラムの課題

- ① 認知度が低い
- ② 教員の負担
- ③ 学生が個人主義

教養演習の課題

- ① 人数が多い(ゼミらしい人数)
- ② 先生によって授業内容にばらつき

T1 交流

「教員・学生間等の交流促進」

	現 状	改善策
同級生	・学類ごとの授業 → 学類内の交流	・学類と横断する授業の拡大 → 全学的交流
上級生	・サークル活動 ・グループアドバイザー	・SLA制度の導入(相談窓) ・GAの継続策(インセンティブ)
OB	・学類のOBと訪問 → 他学類はわからない	・全学のOBリストの作成 (OB名、業種、仕事内容)
教員	・オフィスアワー	・オープンスペース(ディスカッション) ・LINEの導入

T2 カリキュラム

自己学習プログラムの改善

認知度・意欲の向上

教養演習時に周知(具体例)

OBをゲストスピーカーに迎える

事前準備を職員がサポート

→ 教員の負担の軽減

ここで学習集団が生まれるかも!?

キャリアモデルを
高学年も受けられるよう
にし、一度に複数人呼んで
選抜式にする。

情報の授業を♡
選抜にする。
(初めに実技テスト
受かった人 → 選抜
落ちた人 → 必修)

教養演習の
ねらいの共有
クラス間の交流
(学類問わず)
1つのお題で話し合

学生の
興味・関心と
幅広い教養教育を
両立させる仕組みがない

K キャンパスは1つ!

なのに...

- ・かなり過疎
- ・居場所がない
- ・交流が少ない

→ そのための機会が

T 出会える場所がほしい!

- ・カフェ
- ・バー
- ・喫煙所 ... etc.

知らない人とでも話しやすい環境

T 教員リテラシーから...

- ① 研究内容紹介
(パネルディスカッション!!)
- ② 研究室訪問
- ③ オープンゼミ (教養演習など)

T 「社会人として意識できる瞬間が欲しい」
～キャンパスの外へ～

1. 就活の時とは違い! (何の役に立つ?)
2. 学んでいると「社会」とつながりが
見えない。

↓
キャンパス内に「社会」とつながる
潜在的な資源があるはず! (顕在化共有)
(「他者」と出会いたいという欲求) が必要。

グループ5

(K)

教養教育の目的の明確化

- ① 大学の学びのための教養
- ② 社会とつながるための教養
- ③ 専門とつながる教養

(P)

- ① X レポートの書き方やアカデミックなマナー・情報等が保証されていない
- ② Δ キャリア創造科目・自己学習プログラムの方法・内容が追いついていない
- ③ X 時期・時間割・過密スケジュールの問題があり専門とつながっていない

(T)

- ① 教養演習 → ・扱う内容の標準化(最低限)
・教員間連携・教員への支援
- ② キャリア創造科目 → ・アクティブ・ラーニング
・少人数化(ゼミ形式)
- ③ 共通領域 → ・対象時期(3~4年次でも)
・1年次でも専門・時間割調整

(T)

教員・職員・学生の
コミュニケーションの促進



グループ6

英語・非英の履修制度改善

P 情報不足の現状→不満

T 事前説明の充実

- ・シラバス以外で判断できる材料
- ・自主的に判断できる場

オフィスアワー制度を広げる

P 使用しにくいオフィスアワー制度

- ・時間的制約
- ・精神的ハードル

T 先生の周りの人たちの活用

- ・ゼミ、研究室の学生の力をかりる

文理融合の土台を

P 他学類とのつながりが弱い

T 教養演習の全学化を

- 担当教員も複数名に
- 知識の幅、交流の場を広げる

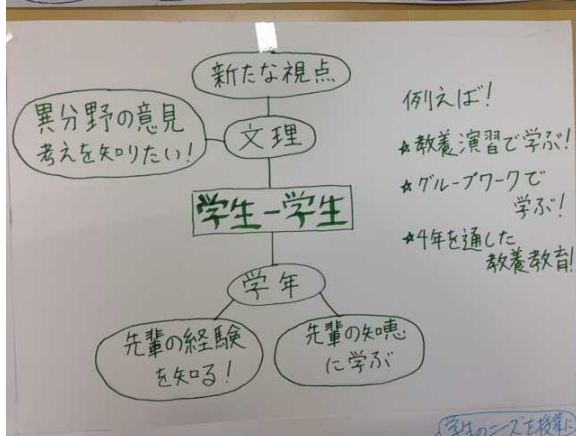
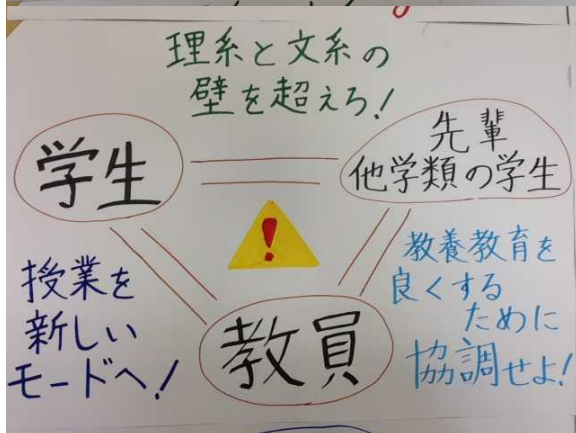
総合広域科目の改善のために

P { 大学の意図と学生の行動のズレ
1年次に取りきき原則
「取りたい科目が取れない」

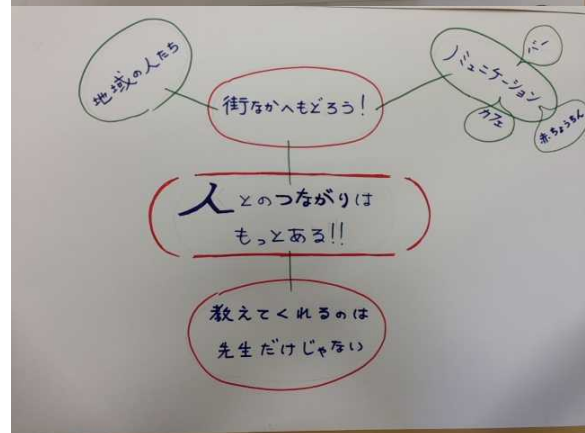
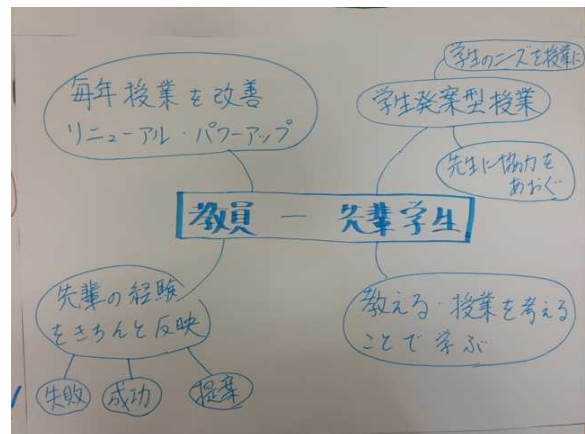
T 4分野各2単位履修の撤廃

グループ8

人とのつながりを 深めて 教養教育を Re Design



グループ8 (続き)



 参加者

		氏 名	備考
教員 (12 名)	学長	中井 勝己	28 日のみ
	副学長（教育）	神子 博昭	
	副学長（学務）	三浦 浩喜	
	東北大学 高度教養教育・学生支援機構	足立 佳菜	
	東北大学 高度教養教育・学生支援機構	鈴木 学	
	総合教育研究センター	丸山 和昭	
	総合教育研究センター	高森 智嗣	
	地域連携課 ACF 事務局	根本 明子	
	人間発達文化学類	平中 宏典	
	行政政策学類	川端 浩平	
	経済経営学類	手代木 有兒	
	共生システム理工学類	石川 友保	
学生 (13 名)	人間発達文化学類 4 年	阿部 詩音	
	人間発達文化学類 4 年	鈴木 百仁加	
	人間発達文化学類 2 年	太田 光	
	人間発達文化学類 1 年	兼子 春菜	
	経済学研究科 2 年	渡部 陽介	
	経済経営学類 2 年	佐藤 潤一	
	経済経営学類 1 年	蓮田 貴大	
	共生システム理工学類 3 年	須田 将真	
	共生システム理工学類 3 年	田所 花菜	
	共生システム理工学類 2 年	石川 竜也	
	共生システム理工学類 2 年	石津 伽奈子	
	共生システム理工学類 2 年	高橋 洋一郎	
	共生システム理工学類 1 年	芳賀 翔太	
職員 (8 名)	教務課	高橋 清典	
	教務課	木村 勝典	
	教務課	岩下 悟士	
	教務課	齋藤 健成	
	教務課	大島 千歩	
	人事課	早坂 美春	
	学術情報課	氏家 秀昭	
	東北大学人事企画課	佐々木 敬規	

FDワークショップ 授業公開&検討会



今年度の実施日程

● 1回目

- ・ 日 程：平成 26 年 5 月 21 日（水）2 時限
- ・ 授 業 者：衣川修平 先生（経済経営学類）
- ・ 実施概要：授業公開「会計学入門」（L 2 教室）
検討会 授業終了後（S 棟小会議室）

● 2回目

- ・ 日 程：平成 26 年 10 月 8 日（水）3、4 時限
- ・ 授 業 者：浅野かおる 先生、千葉悦子 先生、岩崎由美子 先生（行政政策学類）
- ・ 実施概要：授業公開「社会教育課題研究Ⅱ」（M22 教室）
検討会 なし

● 3回目

- ・ 日 程：平成 26 年 12 月 12 日（金）4 時限
- ・ 授 業 者：増田 正 先生（共生システム理工学類）
- ・ 実施概要：授業公開「プログラミング言語論」（コンピュータ実習室）
検討会 なし



第1回 授業公開

日 時 平成 26 年 5 月 21 日 (水) 2 時限
10:20～11:50 授業公開 (L2 教室)
11:50～13:00 検討会 (S 棟小会議室)
授業科目 「会計学入門」
授業者 衣川修平 先生 (経済経営学類)



授業者からの報告

衣川 修平

1. 講義の概要について

他にも多くの科目を担当してきましたが、今回公開した「会計学入門」には他にはない独特の難しさがあるように思います。その難しさとして2点挙げてみます。

第1に、会計学入門は3セメスターに開講される選択必修科目で、2年生のほぼ全員が履修していることにあります。ゆえに講義する者として、これから会計・経営を専攻するであろう生徒を一方で意識しつつ、この科目を最後にもう二度と会計科目を選択しないであろう5, 60人の生徒のことをかなり意識せざるをえません。

会計は実学であり、どの分野に進んで社会に出て、使う可能性が高い科目です。その一方で、その専門用語が日常用語と乖離しており、非常に好悪の分かれる科目でもあります。そこで必要に迫られて、会計を勉強せざるを得なくなったとき、嫌な記憶が障害とならないようにとの配慮から、なるべく楽しく講義をするようにしています。ここが1点目の難しさです。

第2としては、簿記と会計は実はかなり異なる学問であるということです。経済経営学類では、1年時に初等簿記を学びます。しかし簿記が記帳のための技術(財務諸表「作成者」のための技術)だとすると、会計学はなぜそのように会計処理するのかという理論です。またあるいはそのような会計処理の結果をどのように使えば、当該企業を理解できるか、という更なる発展的な技術の勉強であったりもします(財務諸表「利用者」のための技術)。ゆえに、今まで簿記しか勉強したことがない学生(特に商業推薦で入ってきた簿記好きの学生)が躓くことがないような配慮が必要である、という難しさがあります。



2. 講義の工夫

公開講義のときはパワーポイントを使った講義を行いました。その前の回はレジメを使った講義であり、様々な方法を用いています。共通点としては、どちらも穴埋め式を用いていることです。また普段は、計算問題も、講義中に多く解いてもらうことが多いです。これらは、大人数の講義であるため、学生さんが受身の受講とならないようするためです。

私の学生時代、ある先生は威厳を持った、緊張感のある講義をされており、非常に感銘を受けたものです。しかし私には威厳は皆無ですので、そんな講義は到底できません。そこで、ざっくばらんな態度で学生さんに対応し、彼らがリラックスして受講できるような講義を心がけています。

具体的には、問題演習をといてもらうときは、学生さん同士が互いに教えあう「私語」を奨励していますし、私自身も講義中に無駄話をたくさんします。教室内も良く周回しますし、そのときに意図的に学生さんと無駄話するようにしています。そういった会話をきっかけとして、「難しすぎる（易しすぎる）」「速すぎる(遅すぎる)」といった本音が漏れてくることが多々あるからです。しかし、公開講義のときは、さすがに受講している先生に遠慮があり、無駄話ができず、いつもの調子が出ませんでした。講義も15分ぐらい早く終わってしまいました。



3. 講義検討会

大学の教員はきちんと講義方法のトレーニングを受けることがありませんので、このような機会をいただいたことは大変勉強になりました。このような公開講義の蓄積が「Tips集」のような形で、容易にアクセス可能になると、困ったときにヒントになってよいのではないかと思います。



第2回 授業公開

日 時 平成 26 年 10 月 8 日 (水) 3、4 時限
13:00～16:00 授業公開 (M22 教室)
検討会なし

授業科目 「社会教育課題研究Ⅱ」

授業者 浅野かおる 先生、千葉悦子 先生、
岩崎由美子 先生 (行政政策学類)



授業者からの報告

岩崎 由美子

地域住民は、地域生活の向上のために何を課題としているのか、地域づくりでどのような諸活動・学習活動を展開しているのか、地域づくりの担い手としてどのような自己形成・発達を遂げているのか、地域づくりへの参画能力の形成をいかに行っているのか。これまで行政政策学類の授業科目「社会教育課題研究」では、このような問題意識のもと、対象地域（自治体）を決めて調査を行ってきた。しかし、東日本大震災・原発事故により、福島県内ではコミュニティや生活を大きく変えざるをえなくなった住民たちが多数存在する。こうした現状のもとに、2013 年度からは「震災と社会教育・地域づくり」というテーマで授業を実施している。「被災者」「仮設住宅」に着目し、これまでの問題意識を活かしつつ、新たな問題意識を確認しながら、とくに被災者支援に関する調査活動を行っている。

具体的な授業の柱の一点目は、支援をしている（あるいは支援をした）方を大学にお招きしてお話を聞き、受講生は質疑応答や感想の執筆を行い、お話を文字におこして震災の記録として残すことである。二点目は、学生たちが支援の現場に出向いて参与観察を行うことで、リアリティをもって現場での実践をとらえる力を養うことである。そして三点目としては、富岡町の被災者の方々が「語り人」として主体的活動を始めたことに注目し、富岡町社会福祉協議会による「語り人（べ）育成派遣事業」への協力と「語り人」の方々との交流が挙げられる。このたび公開した授業は、この三点目の柱に関わるものである。



この授業に先立ち、受講生は6月に「語り人」の活動拠点である郡山市の「おだがいさまセンター」を訪問して「語り人」の方々との交流を行い、短時間ではあったが彼ら一人一人の「語る」ことへの思いを聞いている。授業当日は、「語り人」10名と事業の指導者である青木淑子氏（おだがいさまセンター）を大学にお招きし、まず、青木氏から富岡町の現状や問題点、語り人事業のねらい等についてお話をいただいた。



その後、「語り人」のお一人のお話を全員で伺った上で、「語り人」の皆さんと学生がそれぞれ3グループに分かれ、会場を変えて小グループでお話を聞き、質疑や意見交換を行った。最後に再び全員がM22教室に集合し、受講生全員が感想を発表して終了した。

受講生の感想としては、「語り人さんのお話は、ラジオ・テレビなどメディアを媒介した伝達手段とは質の違う、独特の人間味や生々しさといったものが伝わってきた」、「訛りや話の重複など、本来ならば聞き取りづらいと感じてしまう要素であっても、むしろ情景を鮮やかに、ありありとかき立てるようで、言葉を探しながら一生懸命に私たちに伝えようとしてくれている意思が感じられた」、「震災を体験した人としていない人との温度差を埋め、自分の気持ちを理解してもらうためには、生の声を届ける『語り人』は大きな力を持っているように感じる」、「話の聞き手である私たちは、これをきっかけに忘れていた3.11をきちんと振り返り、自分自身で考える必要があると感じた。語り人が語るだけではなく、聞き手がこれまで知らなかったことを知り、自分なりにできることを見つけるということまでを含めて『語り人事業』という活動の意味があるのではないかと感じた」等、「語り」のもつ力の大きさを改めて知り、聞き手としての自分たちの役割を見つめ直そうとする意見が多く挙げられた。

この後、学生たちは「語り人」の方々のお話を分担して文字に起こし、その原稿を携えて再び「おだがいさまセンター」を訪問して、今度は学生たち自身が「語り人」のお話を心を込めて「語る」取り組みを行うことで交流を深める予定である。



日 時 平成 26 年 12 月 12 日 (金) 4 時限
14:40~16:10 授業公開 (コンピュータ実習室)
検討会なし
授業科目 「プログラミング言語論」
授業者 増田 正 先生 (共生システム理工学類)



授業者からの報告

1. 授業の概要

福島大学共生システム理工学類の情報系演習では、手続き型言語として位置づけられている C 言語を主に用いているが、C 言語以外にも、様々な考え方のプログラミング方法があることを学ぶのが「プログラミング言語論」である。教科書として、コロナ社発行の「プログラミング言語論」を採用し、具体的には、機械語を簡略化したランダムアクセスマシン (RAM)、関数型言語 LISP、論理型言語 Prolog、オブジェクト指向型言語 Java の 4 つについて学習する。これらを勉強することは、C 言語が外国語学習における英語に対応するとして、ドイツ語やフランス語等の第 2 外国語を学ぶことに相当する。Java 以外については、実際に利用する機会は少ないと思われるが、これらの言語の考え方を学ぶことにより、プログラムの作り方についての理解が深まることを期待している。

今回の授業公開では、論理型言語 Prolog を使った演習を行った。前週の授業で、Prolog の基礎となる述語論理について説明するとともに、Prolog によるプログラムの作成方法と実行方法を解説した。また、インターネットで調べて、Prolog のプログラムを 5 個以上作成する課題を出しておいた。

2. 授業の工夫

5 年前にこの科目を担当することになった当初は講義形式で実施したが、実際にコンピュータを使ってプログラムを作成しないと理解が進まないのので、次年度からは理工研究実験棟 2F のコンピュータ室で演習を交えながら実施する方法に切り替えた。履修者は毎年 60~70 名で、丁度コンピュータ室で演習を行える範囲に収まっている。この科目は開放科目で、プログラミング経験のない他学類の学生も受講しており、また、理工の学生についても C 言語の演習を履修していないものもいる。そのため、最初に C 言語の復習を行い、この科目だけを受講しても一通りの理解ができるようにしている。

毎回、授業時間の前半は解説に充て、後半はコンピュータを使った演習を実施している。解説においては、教科書の要点をまとめたレジュメを印刷して配布し、パワーポイントを使って説明を行っている。演習においては、プリントに解答を書き込む形式でプログラムの実行結果を確認するとともに、毎回3件程度の宿題を課し、簡単な課題は当日中に、少し考える課題は次回の講義までに提出させている。授業は金曜日の4限目で、幸い5限目にはコンピュータ室での講義はないので、多くの場合、時間を延長して、課題に取り組んでいる学生の質問に答えるようにしている。

なお、蛇足ながら、レポートの提出に関して、昨年度までは、メールの添付ファイルで行っていたが、今年度から **Live Campus** のレポート提出機能を利用するように変更した。また、**Live Campus** の小テスト機能を使って、出席確認も行うようにした。

3. 授業の問題点

第1の問題は、授業の内容が学生の身に付いているかどうかという点である。この科目は主に2年生の4セメスタで受講することになっているが、1年後に研究室配属になった3年生に聞いてみると何となく記憶に残っているという程度であった。ドイツ語やフランス語等の第2外国語でも似たような状況かも知れないが、将来的に情報系の仕事に就いた時などに、潜在的な知識・教養となっていて欲しいものである。

第2の問題は、演習として出した課題を本当に自分で解決しているのかという点である。これは他の科目のレポートでも同様な問題かと思われるが、特に、宿題として講義時間外に行う課題については、他の学生からプログラムをもらってそのまま実行することも可能なので、いくらでも手を抜くことはできる。実際に、自分で考えていたかどうかを確認するために定期試験を実施しているが、自分で実施していれば簡単に解答できるような問題について、あまり、あるいはほとんどできていない学生も少なからず見受けられるので、何らかの対策があればと考えている。ただし、この点を追求しても切りがないので、自発的に学びたい学生を育てるという方向で今後も進めたい。

第3の問題は、レポートの内容の確認の手間である。提出されたファイルを **Live Campus** からダウンロードして開き、内容を確認して採点して **Live Campus** に記入するという作業を、人数×3課題に対してほぼ毎週繰り返していると、それだけで長時間を要してしまうので、今後何らかの対策を考えたい。



F Dワークショップ 授業公開&検討会に向けて ー授業者と参観者の皆さんへー

福島大学教育企画委員会

福島大学では、今年度のF Dワークショップとして「授業公開&検討会」を開催することになりました。実際の授業をお互いに見せ合って、具体的に授業をどう改善していったらいいかみんなで話し合おうという試みです。福島大学全体の授業力量充実・向上のためにも、授業を公開された方が「皆さんに見ていただけてよかった」と思えるような、また参観者の方々も「今度は自分の授業を見てもらおう」と思えるような、そういう会になることが必要です。そのために以下の諸点に注意しながら、授業公開&検討会に参加してください。

- 1) 「授業公開&検討会」の目的は授業改善であって、だれかを批判したり、非難したりすることではありません。みんなが前向きになれるような明るいムードの会にしましょう。
- 2) 授業者は、ふだんどおりの授業を心がけてください。他の先生方が聴いているからといって、いつもより高度な内容に触れたりすることのないようにしてください。
- 3) 参観者は、その授業の「いいところ」を発見し、自分の授業にも生かすよう、心がけてください。
- 4) 参観者は、学生と一緒にになって授業の内容だけに集中しないでください。大事なことは、授業中の学生の反応であり、学生がどのように学んでいるかという事実です。授業の内容や授業者の行動の変化によって、学生は敏感に反応しているはずです。学生は、どのようなときに授業に集中し、どのようなときに集中力を失っているのでしょうか。
- 5) 参観者は、今日参観した授業が、15 回分の 1 回であるということにも留意してください。
- 6) 教室の環境などにも留意して参観してください。
- 7) 検討会の場では、参観者が授業者を誉めることから始めましょう。授業者も過度に自己反省の弁を並べたてる必要はありません。大学教育に関しては誰も皆、素人みたいなものなので、お互いにアイディアを出しあって、それぞれが抱える問題を解決していきましょう。

(注意) 授業公開中の**教員同士の私語**は、学生の受講の妨げになりますので、くれぐれも慎んでください。

FD ワークショップ 授業公開&検討会 授業観察カード

* 授業者と授業名（ : ）

【観察の視点(例)】 ① 授業技術に関して ② 授業運営・授業構成に関して ③ 授業の目標・達成度・理解度・満足度・内容に関する取り組みや工夫 ④ 学習活動・学生の参加度に関する取り組みと工夫 など

観察の 視点	参 考 に な っ た 点	疑問や課題が残った点
【メモ】		

この観察カードは、授業参観時・検討会時のメモとしてご活用ください。



4.各学類・研究科における FD 活動

平成26年度 学類・研究科ごとの取り組み

平成26年度 各学類・研究科におけるFD活動

【人間発達文化学類】

教授 半沢 康

I 学類

1 FD研修会

- (1)教養演習Ⅰ・基礎演習報告会(教育課程委員会)
- (2)次年度教養演習・基礎演習担当者説明会(教育課程委員会)
- (3)教養演習Ⅱ報告・意見交換会(教育課程委員会)

2 FD調査

- (1)「教養演習Ⅰ」「教養演習Ⅱ」「基礎演習」実施概要調べ(教育課程委員会)
- (2)クラスにおける学生指導に関する実態調査(前期)(教育課程委員会)
- (3)クラス・ゼミにおける学生指導に関する実態調査(後期)(教育課程委員会)
- (4)新入生入学動機アンケート調査(教育課程委員会、将来計画検討委員会)
- (5)学習と生活に関するアンケート調査(全学類生対象)(教育課程委員会、将来計画検討委員会、学生生活委員会)

II 研究科

- 1 学習ポートフォリオ等の使用状況調査
- 2 研究発表状況等に関する調査(教育課程委員会)
- 3 学業の成果および修了研究についての調査(教育課程委員会)

【行政政策学類】

教授 久我和巳

1. 学類

- ①少人数教育を重視する観点から、教養演習（学類）、専攻入門科目（学類）、専門演習（学類・現代教養）、基礎演習（現代教養）の担当教員にアンケートを実施し、ゼミの運営等につき、工夫した点、問題点、課題などに関して調査をした。集計後は懇談会を実施して、意見交換を行い、得られた情報を学類所属教員にフィードバックし共有化を図っている。
- ②教養演習の一環として、新入生を対象として入学直後の4月に1泊2日の日程で「新入生ガイダンス」を行っている。事前に上級生（シニター）との打ち合わせ、事後に反省会を行い、学生の自主性を尊重した運営を重視している。
- ③3 専攻に分かれる2 年次を前に、1 年次後期に、将来の職業選択も見据えた専攻選択に関する意識調査と要望集約を行った。
- ④FD 公開授業および「アクティブ・ラーニング」実践の一環として、2 年次法学専攻の専攻入門科目共通の企画である「法律討論会」を開催し、その成果を学類刊行物『嶺風』に掲載している。
- ⑤各演習担当教員を「アドバイザー教員」と位置づけて、適宜、学生からの相談や意見聴取に応じ、対策を立てるようにしている。
- ⑥今年度も、昨年同様に、「卒業生アンケート」調査を実施した。

【経済経営学類】

准教授 井上 健

1. 学類

学類では2種類のアンケートを実施している。1つは2年生を対象としたアンケートである。このアンケートでは、入学時から2年生前期の間に開講されている機関的な科目(キャリア形成論・キャリアモデル学習・経済英語演習・経済日本語演習・リテラシーⅠ～Ⅲ)を主な評価対象としている。各科目について、講義の理解度、講義への興味・関心、講義への取り組み、講義で得られたものを尋ねている。2年生後期開始直後に専門演習等の時間を利用して実施しているため、回収率は非常に高い。各科目の担当者はアンケートの集計結果をもとに自己評価を行うことが課されている。また、個人による自己評価に加えて、科目グループ単位(キャリア形成論・キャリアモデル学習・経済英語演習・経済日本語演習・リテラシーⅠ～Ⅲ)の意見交換にもとづいて、科目グループとしての自己評価も実施されている。

もう1つのアンケートは4年生を対象としたものであり、卒業論文提出時に回収することで、回収率を高めている。このアンケートは、入学から卒業にいたるまでの全面的な就学状況を確認することを目的として設計されている。その中で授業評価については、総合評価・外国語科目・専門領域などの領域単位で修得度・充実度などを尋ねている。また、「印象に残り後輩に勧めたい授業」を記入させており、毎年、様々な科目名(教員名)が挙げられている。

以上の2つのアンケート結果をもとに、年度末の3月に専攻単位で自己評価についての会議が実施される。この会議では2つのアンケートの集計結果をもとに、自己評価についての総合的な意見交換が行われる。

2つのアンケート結果にもとづく自己評価活動の結果は最終的に「経済経営学類専門領域カリキュラムに関する日常的自己評価報告書」としてまとめられる。

授業公開及び検討会は以下の通りで実施した。

科目名:会計学入門

授業者:衣川修平 先生(経済経営学類)

日時:2014年5月21日2時限目

授業:10:20～11:50

検討会:11:50～12:30

2. 研究科

研究科では大学院修了者を対象としてアンケートを実施している。アンケート結果にもとづき、年度末の3月に大学院FD研究会が実施されている。

【共生システム理工学類】

准教授 川越清樹

1. 学類

前年度は、平成 26 年度の大学認証評価に向けて「科目別自己評価」、「卒業生・修了生・就職先企業に対するアンケート調査とヒアリング」、「卒業時アンケート調査」と多くのアンケート調査が実施された。本年はその調査結果を分析することを中心とした活動が行われている。

「科目別自己評価」は、教育内容・方法と卒業研究の 2 つに大別された自己評価アンケートが実施された。アンケートの特徴として、学生に対して行った工夫の欄が記載されていることが挙げられる。本評価は、認証評価だけでなく、改善の努力内容を教員間で共有することも主旨にしていることより、具体的な工夫事例を調査し(現在はアンケートの記述のみ)、学生の授業アンケートと照らし合わせて、効果を明確にしていく取り組みも必要といえる。「卒業生・修了生・就職先企業に対するアンケート調査とヒアリング」に関しては、昨年度「質量ともに十分ではないので、今後も継続的に実施する必要性を感じた。」と記載されているように、いわゆる現段階は学類で特定された人のみの評価に偏っている。広く情報を取得するため、研究室の卒業生へのネットワークも駆使して、改めてデータを集積する必要があるといえる。

「卒業時アンケート調査」は平成 25 年度より実施されたもので、今後も教育成果の明確化を図る上で継続する可能性の高いアンケートである。現在、アンケートは収集中であり、その結果をまとめ平成 25 年度との比較をおこない報告する予定である。

授業公開および検討会については、今年度は 1 回実施されている。

日 時 平成 26 年 12 月 12 日 (金) 4 時限 14:40～16:10

授業公開 (理工実験棟 コンピューター室)

授業科目 「プログラミング言語論」

授業者 増田正 先生 (共生システム理工学類)

Live Campus のレポート提出機能を利用した事例などを伺え、有用な授業公開および検討会となった。

2. 研究科

授業および修士・博士論文研究の評価アンケートは、研究プロジェクト型実践教育推進センターが主体となり大学院生を対象に実施されている。調査の結果は、報告書として取りまとめると同時に授業担当の各教員宛に通知されている。大学院の授業は受講者が少ないため、アンケートの人物特定されやすい状況となるため、今後とも調査方法や公表・活用方法について検討を続ける必要がある。



5.現代教養コースにおけるF D活動

現代教養コースにおけるF D活動